様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５２０２８

研究課題名（和文）現代美術における保存・修復ネットワークの構築

研究課題名（英文）Network construction for the conservation of contemporary art in Japan

研究代表者
平　諭一郎（TAIRA, Yuichiro）

東京藝術大学・社会連携センター・講師

研究者番号：１０５８２８１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：構築した現代美術の保存・修復ネットワークを活用して、国内外における現代美術の長期保存と修復事例を調査するとともに、素材や技法を横断した現代美術の新たな修復方法を模索し、ブラウン管テレビを用いた作品の画期的な修復の可能性を示した。さらに、印刷物『ナムジュン・パイク《The More ,the Better》に関するノート』を発行し、現代美術を含めた新たな文化財保存修復理念を学界および社会に提示した。

研究成果の概要（英文）：The forms of artworks have radically diversified in recent decades. In contemporary art, which concepts are considered important, it is necessary not only to establish principles for the conservation and restoration of artworks while maintaining their integrity and identity as physical “objects” but also to maintain their conceptual sameness. Therefore, I believe that it is necessary to integrate traditional Japanese conservation and restoration principles with European contemporary art conservation and restoration principles and propose new principles based on both these theories and ethics..
I have been investigating cases of the conservation of contemporary art in Japan and abroad, and exploring new methods to restore contemporary art using various materials and techniques. I believe that this study has suggested the possibility of a groundbreaking method to restore artworks that use CRT television, hence it can contribute to the advancement of research in this area.

研究分野：文化財保存学（現代美術）

キーワード：文化財保存学　現代美術　現代アート　修復　メディア・アート　ヴィデオ・アート　コンテンポラリーアート

１．研究開始当初の背景

古くより日本における絵画は「画師」「経師」をはじめとした分業によって制作され、仕立てられ、修復されてきた。千数百年前から素材や技法が連綿と受け継がれ、それぞれの専門分野において技術の研鑽、経験の伝承がなされ、これまでの日本画の保存と修復に関しては理念、技術ともに史上最高水準に達していると言ってよい。殊に「もの」を重視する日本画の修復では、オリジナルにいっさい手を加えることなく、現状維持を理想とし、美しく歳を重ねていく保存・修復理念が確立している。

しかし、日本画の概念が過渡期を迎え、様々な素材の調達から作品の完成までを制作者がひとりで引き受けることが当たり前となった現代では、素材や技法が多様化し、混合技法という種別の作品が数多く世の中に送り出され、従来の画一な保存・修復では対応できなくなっている。事実、昨今の美術館の企画展では、制作者に作品の修復を依頼することも少なくない。

作品制作のなかで制作者が自由に素材を選定していった結果、作品の保存性は非常に脆弱と言わざるを得ない状況となっている。しかし、制作者が作品の保存性を重視し過ぎると、素材や技法が制限され、自由に制作することができなくなる懸念がある。これに対し修理技術者は、制作者が自身の作品の保存性を考慮すべきであるという見解と、制作者は作品の保存性から解放されるべきで、現代美術作品の保存・修復については修理技術者が担うことであるという見解がある。とりわけ公共の美術館に所蔵されている作品は、国民ひいては人類の共有財産であり、作品の保存性を誰が担保するのかについては、現代美術に関わる様々な専門分野の意見と現状の課題を把握する必要があるだろう。

２．研究の目的

美術制作における素材や技法が多様化、複雑化した現代において、日本画や油画といった分野に縛られない作品が数多く存在し、未来に向けてどのように保存・修復していくかの指針が定まっていない。本研究は、国内外の美術館における現代美術の保存・修復の実態調査を行い、制作者、管理者、修理技術者からなる現代美術の保存・修復ネットワークの構築を試みる。

また、現代美術においては、従来の日本絵画における「もの」を第一義とする保存・修復理念だけでなく、作品の何を保存していくべきかを含め、コンセプトを反映した理念の必要性を検証し、未来に向けての新たな保存・修復理念を提唱することを目的とするものである。

３．研究の方法

（１）現代美術作品の保存・修復についての現状調査、および関連する資料や情報収集

近現代美術を所蔵する国内外の美術館、博物館、ギャラリーにて学芸員、キュレーター、修復家にヒアリング調査を実施し、現代美術作品における収蔵、展示、保存、修復の実態調査を行う。

（２）現代美術作品の保存修復方法の提示

現代美術の中でもその保存や修復が最も困難だと言われている、ヴィデオ・アート(video art)―なかでもブラウン管テレビを用いた作品―の保存理念および修復方法について考察し、ブラウン管テレビの物質的な「もの」としての同一性を保持しながらも、内部の電気的機構を代替することで、より耐久性の高い受像機として修復する方法を提示する。

（３）現代美術を含めた新たな文化財保存・修復理念の考察

現代美術作品の保存・修復についての現状調査および収集した情報を通じ、日本の伝統的な保存、修復理念と欧州のコンテンポラリーアートの保存、修復理念を融合させ、現代美術を包含した新たな文化財保存・修復の理念を提唱する。

４．研究成果

（１）国内外における美術館、

国内外の美術館や博物館、研究機関にて現代美術作品の展示状態や修復施設を調査するとともに保存・修復専門職員との意見交換を行い、統計データを収集した。国内では、東京国立近代美術館、東京都現代美術館、東京都写真美術館、東京藝術大学大学美術館でヒアリング調査をおこない、海外では、韓国国立中央博物館、韓国国立現代美術館、サムソン美術館 Leeum、大英博物館、TATE などで先進的な事例の収集をおこなった。特に、大英博物館に新設される Conservation Studio や、Time-Based Media Art の保存・修復分野を牽引してきた、Pip Laurenson（英・TATE）と現代美術作品の保存・修復における現状の問題点、改善方法を話し合うとともに、世界共通のルール策定について検討を実施してきた。

また、越後妻有トリエンナーレや瀬戸内国際芸術祭における展示作品の保存や修復についての取材もおこない、美術館や博物館外での作品保存のあり方についても検討している。

（２）国内外における現代美術の保存と修復について調査を進める中で、我が国において現代美術作品の収蔵や展示、保存や修復の包括的な方法論はいまだ確立されていないことがわかってきた。現代美術の中でも特にメディア・アート（New Media Art,Time-Based Media）における展示、保存、修復については喫緊の課題である。メディア・アートと呼ばれる作品群は、その媒体（メディア）が伝

統的な素材とは異なり、初期にはフィルムやカセットテープ、ビデオテープから始まり、ブラウザ、ソフトウェア、オペレーティングシステム等の新しい媒体（ニューメディア）が用いられている。ニューメディアは単に記録媒体として用いられるだけでなく、作品の外形を規定する要素として使用されていることが多く、データの保存もしくは修復においてそのメディアを変更するか否かを容易に判断することは難しい。
現代美術を収蔵する国内外の美術館において、その保存や修復の問題を抱えているジャンルのひとつにヴィデオ・アート（video art)がある。なかでもブラウン管テレビ（CRT：Cathode Ray Tube）を用いた作品、また展示において受像機（ディスプレイ）として使用する作品は１９８０年代に隆盛を極め、世界中の美術館に数多く収蔵されている。しかし、ブラウン管自体の寿命や電気的なトラブルでの故障事例が後を絶たず、早急な対処方法の確立が叫ばれている。すでに世界的に製造が終了しつつあるブラウン管テレビは、一般家庭においては液晶ディスプレイ（Liquid Crystal Display、通称：LCD）に代替されており、ヴィデオ・アート作品の受像機としてブラウン管テレビが使用されている場合にも、テクノロジーの更新とともに受像機の代替が行われていくものと思われる。

2012 年にはナム・ジュン・パイク：Nam June Paik（1932～2006）の代表作のひとつである<The More ,the Better>の保存と修復に関する大規模なシンポジウム（How to Conserve The More ,the Better）が韓国で開催され、ブラウン管テレビの交換や、表示部分のみ LCD へ代替変換する案が検討された。しかし、ナム・ジュン・パイクや、ゲイリー・ヒル：Gary Hill（1951～）に見られるように、ブラウン管テレビが作品の彫刻的な構成要素として使用されている場合には、ブラウン管テレビを LCD に代替すると、作品の外形を著しく変化させることになり、作品の「もの」としての同一性を維持しているとは言い難い。

そこで、本研究では現代美術の中でもその保存や修復が最も困難だと言われている、ヴィデオ・アート（video art)―なかでもブラウン管テレビを用いた作品―の保存理念および修復方法について考察し、ブラウン管テレビの物質的な「もの」としての同一性を保持しながらも、内部の電気的機構を代替することで、より耐久性の高い受像機として修復する方法を提示する。

これまでにブラウン管テレビを用いた作品が故障した場合の処置方法として、多くはそのまま放置するか、もしくは予備のブラウン管テレビに交換する方法がとられることが多かった。近年、欧州を中心にブラウン管テレビを LCD に代替する修復する事例が見られるが、ブラウン管特有の丸みを帯びた表示画面から平坦な画面への変更、さらには画面比率の違い等による明らかな外形の変化が認められ、元々の作品の印象を著しく損なってしまう。そこで本研究では、ブラウン管テレビの修復における外形的な変化を排除し、映像部分においては新たなテクノロジーに代替しつつもメディアに依存しない機構を目指し、より安全かつ持続性、保存性の高い仕様への修復方法を検討した。

本研究におけるブラウン管テレビを用いた作品の修復方法は、ブラウン管テレビの外形はそのままにブラウン管部分のみを取り外し、代替物としてアクリル　製のリアプロジェクター用スクリーン（２ミリ厚）に、透明アクリル板（５ミリ厚）を重合接着したものを基材とし、熱プレスで曲げ加工してブラウン管の形状と同じ曲率を再現した擬似ブラウン管を取り付ける。さらにテレビ内の空いたスペースに設置したプロジェクターから、スクリーンの反対側のミラーに向けて投射し、反射させてリアプロジェクター側へ映像を映し出すものである。この方法により作品の外形を変更せずに、ブラウン管テレビの受像機（ディスプレイ）としての機能を切り離して、現代のテクノロジーに代替する修復が可能となった。また、映像装置にプロジェクターを用いることにより、将来的に新たな機構へ容易に再変更できる柔軟なモデルであると言える。

これまでに国内外における現代美術の修復事例を調査するとともに、素材や技法を横断した現代美術の新たな修復方法を模索してきたが、本研究はブラウン管テレビを用いた作品の画期的な修復の可能性を示し、当該分野における研究の発展に貢献できるものと考えている。

（３）美術作品の形態が急激に多様化する中、コンセプトが重要視される現代美術においては物質的な「もの」としての同一性を維持する保存、修復理念だけでなく、コンセプトの同一性の維持が必要であるため、日本の伝統的な保存、修復理念と欧州のコンテンポラリーアートの保存、修復理念を融合させ、新たな理念を提唱する必要がある。

上記検討結果を盛り込んだ印刷物『ナムジュン・パイク《The More ,the Better》に関するノート』(Some Notes on Nam June Paik《The More ,the Better》)（東京藝術大学、2015 年 3 月)を発行し、現代美術を含めた新たな文化財保存・修復のあり方を学界および社会に提示した。

今後は、これまでの研究で構築した現代美術の保存・修復ネットワークを活用して、海外における先進的な保存や修復の事例を調査・分析し、学際的な協働体制を築いて、日本におけるメディア・アート作品の長期保存計画および修復方法を確立することを計画している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　件）

〔学会発表〕（計１件）
平諭一郎　他「現代美術における保存と修復」-ブラウン管テレビ（CRT）を用いた作品の修復について-　文化財保存修復学会大会 2014 年 6 月

〔図書〕（計４件）
平諭一郎、伊東順二、荒井経　他「ナムジュン・パイク《The More, the Better》に関するノート」、東京藝術大学、2015 年 3 月

平諭一郎、荒井経　他「現代日本画の修復理念　−戦後の日本画から現代美術まで−」共著書『日本画 名画から読み解く技法の謎』、世界文化社、2014 年 11 月

荒井経　他 編著『東京藝術大学と敦煌研究院－交流の 30 年とこれから』、東京藝術大学、2014 年 3 月

荒井経　他　共著『日中国交正常化 40 周年記念日中美術展東洋美術の未来を探る－日本画と工筆画展図録』、東京美術倶楽部、2012 年

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
平諭一郎 招待講演「Advanced technique of Conservation」Accademia di belle arti di Firenze「From Classic to the future」、イタリア、2014 年 5 月

荒井経 招待講演「東京藝術大学における文化財保存学の教育と研究」韓国、伝統文化大学、2014 年 5 月

荒井経 招待講演「東洋画の保存修復と東京藝術大学における教育」韓国、ソウル大学、2012 年 10 月

６．研究組織
(1)研究代表者
平　諭一郎（TAIRA, Yuichiro）
東京藝術大学・社会連携センター・特任講師
研究者番号：10582819

(2)研究分担者
伊東　順二（Ito, Junji）
東京藝術大学・社会連携センター・特任教授
研究者番号：30422637

荒井　経（ARAI, Kei）
東京藝術大学・大学院美術研究科・准教授
研究者番号：60361739

(3)連携研究者
半田　昌規（HANDA, Masaki）
東京藝術大学・大学院美術研究科・非常勤講師
研究者番号：20538764

京都　絵美（MIYAKO, Emi）
東京藝術大学・大学院美術研究科・非常勤講師
研究者番号：40633441

(4)研究協力者
鈴木　晴彦（Suzuki, Haruhiko）
久保　仁志（KUBO, Hitoshi）
桐原　瑛奈（KIRIHARA, Eina）